

ストめ自由の言論、苦労に難糧食...

107年寮生の姿一冊に

1898年(明治31年)に開設され、2005年に閉鎖された私設の北大学生寮「青年寄宿舎」の元寮生らが、1世紀を超える寮の日記を一冊の本にまとめた。北大出版会が11月上旬に発行した「宮部金吾と舎生たち 青年寄宿舎107年の日記に見る北大学生」。二つの大戦、復興と時代が移る中で、寮生たちの暮らしの変化や、学生らしい変わらぬ反骨精神が伝わってくる。

北大「青年寄宿舎」の日記 出版

寄宿舎は、北大の前身の札幌農学校2期生で、同校教授を務めた植物学者宮部金吾氏(1860~1951年)が、学生への宿舎不足解消のため有志と開設した。当初借家だった。

だが、1900年に自前の木造舎屋を札幌市中央区北5西9に完成。寮生が寮費徴収などを行う自主自律や禁酒禁煙を舎是に、計902人が暮らした。

日記は60冊余りで、寮の閉鎖後、元寮生の田端宏・道教育大名誉教授(80)らが保管。田端名誉教授を編集委員長に元寮生計13人が手分けして3年がかりで日記を読み込んだ。46年まで舎長だった宮部氏の存命時を中心に編集した。

日記は寮の日直が、寮生の生活や思い、宮部氏を囲んだ議論の様子などを記入した。宮部氏については、大正時代



出版した本「宮部金吾と舎生たち」を手にする所伸一編集副委員長

生活の変化、気骨伝える



昭和初期に撮影された私設の北大学生寮「青年寄宿舎」の外観(「宮部金吾と舎生たち」より)月9日)との変遷の記述がある。

食糧難をめぐっては、39年に砂糖不足となり、翌年「飯はドンブリに盛り切り一杯、みそ、しょうゆも配給制に。日々の食糧を得るため寄宿舎の周りを耕し、正月の雑煮は「大根ともちだけ」(44年)となった。

政治などに関する書き込みも多い。28年には集会と言論の自由を求めて授業を「ストライキ」。

太平洋戦争開戦から間もない42年1月、「東洋中心の時代」を掲げる学内の新聞の論調に賛同しながらも、「何でもかでも西洋的なものを排斥しようとするのは愚かな事」と記述している。

編集副委員長の所伸一(北大名誉教授(65))は「各時代の学生の姿を記録した資料としても貴重」と話す。

A5判、402頁、7875円。問い合わせは北大出版会011・747・2308へ。

戦後は「舎内での厳守」と緩和され、後年は舎内でも「平凡と煙草をふかしたり酒杯をかわす輩が多い」(80年11